

国際交流会とスマイル・サロン

松 田 美 香
国 際 交 流 会

0. はじめに

国際交流会とは、別府大学の学生が企画・運営する国際交流のための学生サークルである。現在、在籍者21名（うち外国人留学7名）であるが、実際にはより多くの留学生とともに活動している。活動内容は多岐にわたるが、一言でいえば、外国人留学生と触れ合うすべての機会をとらえ、楽しむための企画を練り実行しようとしている。

本稿では、国際交流会（以下、交流会）の今年1年の活動と、新しく活動に加わったスマイル・サロン（以下、サロン）との関係について報告する。

1. 部会

「部会」とは、週1回のペースで行われる、交流会が企画する催しのことである。学生たちが作成した「国際交流会サークル活動（2009年11月～2010年11月）」（参考資料1）を見ると、季節や行事に合わせた催しが開かれている。

2009年12月…クリスマス会・レクリエーション（各種ゲーム等）

2010年1月…百人一首大会・鍋パーティー

2月…留学生送別会（飲食店）

3月…4年生の送別会（飲食店）

4月…新入会員歓迎の花見・日本の遊び文化の紹介（折り紙、あやとり、カルタ）

5月…レクリエーション（各種ゲーム等）・お好み焼き作り

6月…ジュンブライド（6月の花嫁）の紹介・大分郷土料理の団子汁とやせうま

7月…七夕

10月…石垣祭の出し物についての話し合い・石垣祭の売り物試食会（サンラータンとチヂミ）・看板作りと国際弁論大会

の予行練習

11月…石垣祭のメイン会場にて「国際弁論大会」、模擬店の出店・幹部交代

料理も部会の活動の柱である。参加者の国の料理を取り入れ、毎月1回のペースで食物栄養科の加工室を借りて料理を行った。毎回材料費のみを参加者から徴収し、全員で支度から後片付けまで行う。料理の会は参加者が多く、共に体を動かすことの楽しさと大切さを実感する。

部会のもうひとつの柱は石垣祭の準備である。10月初旬から、会議をして石垣祭で模擬店に出す料理を決め、料理の試食会、弁論大会の練習会、看板作りを行う。石垣祭が近付けば、部会だけでは時間が足りず、毎日のように活動している。

11月に石垣祭が終了した次の部会時に、幹部交代を行う。今年は引退していた4年生が中心になって、花束や感謝状を授与するなど、華やかな会となった。同時に新幹部が紹介される。幹部決定は推薦と話し合いによってなされている。幹部になると、毎回の催しを企画し、それを実施するための事前準備を行う。幹部は、日ごろから参加者がどんな活動がしたいか、新しく加えるべき企画がないかを聞き出すよう努力している。特に留学生からの要望にはなるべく応えるよう心がけているが、場所と費用の制約があり、幹部は常に部会の企画に知恵を絞る。この1年を振り返ると、日本の文化を取り入れた活動が増え、留学生からの反応も良いようである。日本人学生が知っている遊びや風習を紹介する段階から、自分たちも新しく学び、技能を高めていくようになれば、交流会としての特徴がより明確になると思われる。



部会で「お好み焼き」を作る

II. 日本語教育研究センター行事への参加

4月と9月…ウェルカム・パーティー

(新入留学生のための歓迎会)

5月と12月…第2次オリエンテーション

(日帰りバス旅行)

毎年、当センターでは、上の2つの行事を半年毎に行っている。ウェルカム・パーティーは、昼休みの時間に軽い飲食をしながらのお楽しみ会である。交流会は、ここでゲームの進行とサークル紹介を行う。毎回、幹部と松田が事前に企画について話し合うが、今のところ、ビンゴゲーム以上に全員が楽しめるゲームが見つからないのが悩みである。

第2次オリエンテーションは、大分県内の観光名所見学と学生・教員の懇親のために企画している行事で、企画・運営は当センターの教員が行う。交流会は各バスに2～3人ずつ乗り、行きのバスの中でのゲームなどを担当し、旅行に同行して教員をサポートする。近年、バス内で立ち歩くことが禁止され、高速道路ではシートベルト着用を義務付けられているため、どのゲームもやりにくくなった。しかし、そういう条件の中でも楽しめるものを探し、教員からのアイデアも得て、今回は「風船送り」「名前当てゲーム」「ビンゴゲーム」を行った。「風船送り」は着席したまま風船を往復させて速いチームを決めるゲーム。単純なゲームだが間違いなく白熱する。「名前当てゲーム」は今回新たに加わったもので、人気の芸能人の写真を拡大コピーし、画用紙に黒ペンで大きく苗字を書いて見せる。氏名を当てた人に賞品を与えるもの。

芸能人に興味を持つ留学生が大活躍した。「ビンゴゲーム」はウェルカム・パーティーで行っているが、バス内ではカードで番号を引き、マイクで知らせる。10位まで賞品が与えられ、当たった人まで手から手へ賞品が移動するのが、さり気ない交流になっている。賞品はどれも菓子や100円ショップの商品であり、賞品を得て喜ぶというよりは、「当たる」こと自体を楽しんでいるようだ。

今年の5月は杵築市の城下町散策と国東半島の「弥生のムラ」での火起こし・勾玉作り体験をした。12月は天瀬町の高塚愛宕地藏尊を見学し、引き続き九重町の夢大吊橋を見学し、午後は九重町九重文化センターにて「ソフトバレーボール大会」を行った。交流会はソフトバレーボール大会において、コート設営、「交流会チーム」としてゲームに参加、閉会式時にコート撤去と体育館内の掃除を担当した。

毎回、交流会の全員がこれらの行事に参加できるわけではないが、年4回の当センター行事に企画から参加することを交流会メンバーたちは楽しみにしている。その理由は、多くの留学生と関わるができる点、さらに交流会の宣伝にもなり積極的な留学生を直接勧誘できる点にあらう。交流会の活躍により、各行事が円滑に行われていることは間違いなく。今後も両者の連携を保ち、2つの行事を改善・発展させていきたい。



準備体操時に、めじろん&サンタに扮する

III. 国際弁論大会と模擬店(石垣祭)

今年11月6日(土)、石垣祭のメインステージで、別府ユネスコ協会後援「国際弁論大会」が



石垣祭の国際弁論大会で、民族衣装を紹介

国際交流会によって行われた。この弁論大会は、もう10年以上続いている恒例行事であり、実施は交流会に任されてきた。ここ数年、弁士決定後は、交流会の担当者が留学生とともに弁論の練習を行い、本番が近くなると交流会メンバーに披露する予行練習をしている。このようなバックアップのもと、3人の弁士が発表し、4人の審査員からそれぞれの賞で表彰された。交流会は単なる弁論大会のスタッフではなく、弁論大会の質を上げるべく、弁士の練習場を提供し、日本語力を支える努力をしている点が重要である。また、今年は弁士や、司会者やスタッフに民族衣装を着てもらい、審査中は民族衣装を紹介するなど、国際色豊かなことをアピールした。ちなみに、司会者の男性はスリランカの民族衣装、女性は日本の振袖と袴、副部長はスリランカの民族衣装のサリー、弁士の1人は母国モンゴルの女性用上着を実際に着用して紹介した。

模擬店は、先述のサンラータン（台湾の具だくさんスープ）とチヂミ（韓国のお好み焼き）を作って売った。サンラータンは調味料の調合が複雑なため、最後の仕上げは台湾出身の留学生の1人しかできず、彼が2日間休みなく作り続けた。また、初日に比べると2日目は売れ行きが伸びず、手分けして学内を売り歩いた。1日目も2日目も模擬店の周りには交流会の日本人学生と留学生が自然に集まり、とても賑やかだった。

学生たちの努力と工夫によって成功裏に終わった今年の石垣祭だが、模擬店の場所からメ



石垣祭の模擬店にて、サンラータンとチヂミ販売

インステージが見えない聞こえない状況だったので、国際弁論大会を見ることができたのは担当者だけだった。そこで、幹部交代式後に記録のために撮影していたビデオを上映した。国際弁論大会と模擬店の両方を弱小サークルで行うことは決して易しいことではなかったはずだ。しかし、部会に準備を組み込み、担当者を決めて早くから取りかかることで、今年の成果を得ることができたのではないと思われる。石垣祭でした苦労が、卒業論文作成、就職活動、さらには社会人としての企画力や実行力の礎になってくれると信じている。

IV. スマイル・サロンの開始

今年5月末、本館22番教室に「スマイル・サロン」と呼ばれる国際交流サロンが誕生した。平日16:30～18:00の1時間半、教室に紅茶やお茶などのセットとゲーム、漫画や雑誌や旅行ガイドなどの読み物、来訪者ノートや自由帳を運び込み、看板を立てて、学内外や国籍を問わず、国際交流を希望する誰もが来られるサロンを運営することにしたのである。

多くの留学生から「日本語を習っても使う場所があまりない」「日本人学生との交流がない」という声があり、この問題に応える場所作りとして当センターと国際交流会の協力のもと、サロンが発案された（詳しくは参考資料2を参照）。

運営は交流会に任せられ、会員の中でシフトを組み、担当者が会場設営や飲料の出し入れを行う。事前に幹部で話し合ったが、「何をするか」

については継続的に話し合っていくことにして、それまで部会でしていたゲームやお菓子パーティーをもとに、サロンに来てくれた留学生と楽しく話せる部屋を目指している。日本語教育研究センターからは電気ポットや文房具の貸し出しをして援助している。センター教員室とサロンは隣り合った部屋なので、仕事帰りに寄ってくれる教員もいる。また、サロンの部屋を「金魚鉢」と呼ばれる両面がガラス窓の見通しのいい教室にしているので、開放的な印象である。



看板にハングル文字を書く

夏休みを挟んで約6カ月が経過した。サロンの教室は、今や国際交流会の溜まり場として定着したようだ。交流会の大学院生や4年生の出席率も、サロンが無かったころに比べると格段に高くなった。この場所に来れば、必ず誰かに会えるという場所ができたことが大きいと思われる。

一方、留学生の参加率は思うほど伸びていない。勇気を奮ってサロンに足を踏み入れてくれた留学生も、後期にはアルバイトを始めて参加できなくなってしまった。アルバイトをあまりしない短期留学生も、送りのバスの時間とサロン開始の時間が重なり、部会以外の日は残らない。時間や空間の制約によって阻まれているの

は何とかしなければならないが、それでも来ようと思わせる活動内容を作っていく努力も必要だ。教員と幹部、幹部と会員で、知恵を絞っているところだが、妙案には至っていない。

それでも、敷地内の寮に住んでいる短期留学生数名が常連となり、石垣祭など交流会の他の活動へも参加するなど、サロンが他活動の呼び水のような働きをするようになったことは大きな収穫である。実際に、多人数が押し掛けて来たら、現有のスタッフでは対処できない。今はサロン活動に賛同してくれる留学生との絆を深め、その一方で待ち合わせや休憩場所としての役割も果たしていく。この繰り返しの中から、日本人学生と留学生の温かな交流が形作られていくことを応援するのが、当面の当センターの役割であろう。

V. 交流会とサロン（学生の視点から）

以下は、サロンに関わった学生たちから寄せてもらった文章である。交流会がサロン活動をする前と後では変化があったか、あったとしたらどんな変化なのかを一人一人振り返って書いてもらった。留学生との交流を望み、そのために努力している国際交流会の姿が感じられたなら幸いである。

私は日本人学生と留学生が交流できる場所、サロンができて、本当に嬉しかったです。一週間に一度しかなかったサークル活動もサークル以外の日にサロンをすることによって国際交流会の雰囲気も変わり、私自身サロンを始める前に比べ、日本人学生と留学生が共に活動できる



スマイル・サロン

環境作りを目指すようになりました。今はまだ、サロンは日本人学生や留学生にあまり知られていませんが、これからもより一層努力し、輪を広げていこうと思います。

(部長 国文学科3年 後藤香里)

私は留学生と交流がしたいと以前から思っていました。サロンが開かれることで留学生と触れ合う機会が増え、嬉しく思います。しかし、思った以上に積極的に話しかけることができませんでした。今後は、留学生がまた来たいと思える場づくりを心がけたいと思います。

(副部長 国際言語・文化学科 清水李枝)

スマイルサロンの最初の頃を思い出そうとして、自分自身の中にサロンが定着していることに気づき、驚きました。他のたくさんの人にとっても、スマイルサロンが定着した場所になればいいと思っています。

(元会計 史学科3年 皆見朋子)

サロンができてから私は、積極的に人に話しかけるようになりました。また、サロンをしている時間、いつ誰が来るかわからないので、その人を笑顔で迎えられするように、いつも笑顔でいるようになりました。この2つが私にとっての「サロン変化」です。

(元部長 史学科3年 三浦彰子)

参考資料

1. 皆見朋子「国際交流会サークル活動（2009年11月～2010年11月）」別府大学国際交流会
2. 松田美香「国際交流サロン『スマイル・サロン』を始めて」『地域社会研究』第19号（2010.11.1）別府大学地域社会研究センター



今年最後の部会「クリスマス会」